

霞

輪郭の無い不定形な境界

指導教員 吉松秀樹教授 印

8AEB1214 内田 恭平

1.問題意識 「霞」

明確な境界によって区切られた建築ではなく、「霞」のような曖昧な境界を用いて自由な建築が作れないだろうか。

2. 分析 「曖昧な境界」

霞のような境界とは曖昧で場面と場面を分ける境界が認識できない状態のことである。これは大和絵のすやり霞という技法にも見られる (Fig.1)。



Fig.1 すやり霞で曖昧に区切られたシーン(北野通夜物語)

3_1. 分析 「輪郭の無い境界」

鳥キッチン (Fig.2) では屋根によって曖昧な境界をつくり出しているが、軒によって「輪郭のある境界」が発生している。

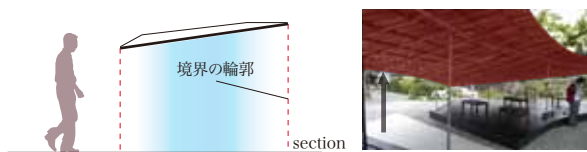


Fig.2 屋根によって内外が曖昧に区切られた鳥キッチン

KAIT工房では柱や植木によって曖昧な境界をつくり出している (Fig.3)。その結果、霞のように「輪郭の無い境界」によって空間が形成されている (Fig.4)。

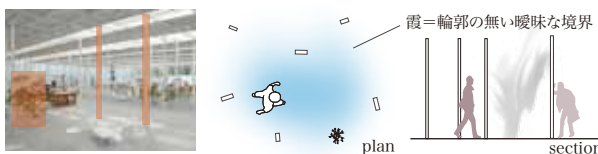


Fig.3 柱で区切られる空間(KAIT工房)

Fig.4 霞のような輪郭の無い境界が生まれる

3_2. 分析 「ゆらぎ」

霞のような境界をつくり出すための分析モデル。すやり霞をヒントに柱を疎密をつくり出すことで境界が変化する (Fig.5)。霞のような境界をつくり出すには、均一なものではなく「ゆらぎ」が必要だとわかった。



Fig.5 疎密によって変化する境界

4_1. 手法 「ゆらぎを演出する モアレ」

霞のようなゆらぎを演出するための手法としてモアレを用いる。モアレとは幾何学的に規則正しく分布する線を重ね合わせると、その間隔の疎密によってできる斑紋のこと (Fig.6)。このモアレの疎密によって境界の認識に変化を持たせる (Fig.7)。



Fig.6 モアレを検証したモデル

Fig.7 境界面にモアレを用いて認識に変化を持たせる

4_2.手法 「不定形モアレ」

通常モアレでは発生したモアレは規則性を帯びているため認識の変化を持たせることが出来なかった。そのため空中を漂う霞からパターンを抽出することで不定形なモアレを展開する。不定形なモアレによって均一ではない自然現象のような疎密が生まれる (Fig.8)。



Fig.8 霞より疎密のパターンを抽出し、自然現象のような疎密を作り出す

5. 提案 「漂う境界」

不定形モアレを用いて市民ギャラリーを計画する。不定形モアレを平面に展開することで不均一な境界の疎密が生まれる。境界の疎密によって空間が生まれるが、その境界は霞のように「輪郭を持たない」。訪れる人々によって空間の認識の仕方は異なり絶えず変化し続けるギャラリーとなる (Fig.9)。

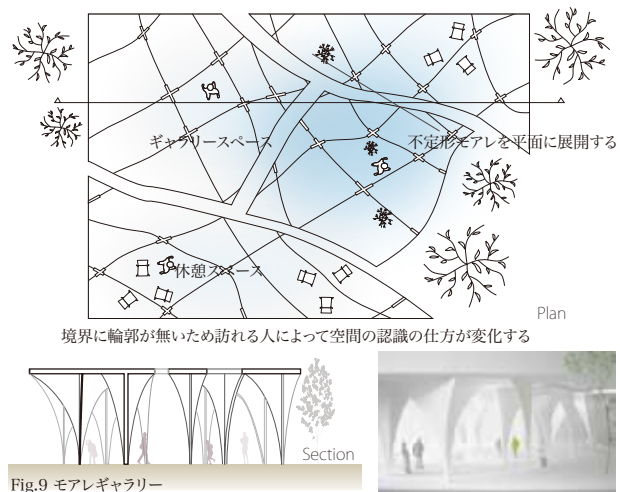


Fig.9 モアレギャラリー